

## 落合宿井口家と養蚕

令和五・六・三〇

杉村啓治

### はじめに

中津川市落合の本陣家井口家は本陣業務が終了してからは、養蚕業に携わっていた。「井口家本陣資料」には、養蚕に関係した各種文書類が残されている。

私は、これらの実物は拝見していないので、内容については述べることができない。

しかしながら、これらの養蚕資料を詳細に検討しないと中津川市特に落合町及び井口家の「養蚕業の歴史」を語ることはできない。

ここで、今回は養蚕と生糸生産の歴史について『中津川市史』（下巻・近代編Ⅰ）を元にして、述べたい。全国的展開については関係著書を取り上げた。

### 第一節 養蚕と製糸

我が国は古代から江戸中期頃迄は生糸や絹の輸入国であった。しかし幕末から明治初期にかけて生糸の輸出が急増し、一躍輸出大国となった。昭和初期には年間四〇万トン程の繭を生産し、世界一の時代となった。第二次大戦に

より生糸生産や絹製品が休止状態となった。戦後は一時期生産が復活したものの、昭和五〇年以後は生糸輸出は途絶えてしまった。平成二年（一九九〇）では世界の繭生産の四%となっており、二・一万吨であった。

二十一世紀では国内の絹製品特に和服の使用が減少しており、ますます生糸生産・絹製品の使用が減少の一途である。参考文献は伊藤智夫『ものと人間の文化史』（絹Ⅱ）法政大学出版局、一九九二年六月一日である。

生糸は蚕から作られる。蚕の卵（蚕種）は平らな紙に産み付けてあるから「種紙・蚕種紙・蚕紙」と呼ばれる。

上等な種紙には五万粒の卵を産み付けていた。この種紙を作るには雌蛾が一〇〇匹以上が必要であった。蚕の幼虫を見て雄雌を鑑別する鑑別士は女性が多く「鑑別嬢」と呼ばれ各地で厚遇された。

「養蚕発祥」は中国江南地方であろうとされる。これは「カイコ」（家蚕Ⅱ飼子Ⅱ飼育蚕）であり、カイコ蛾科にはカイコ、クワコ（桑蚕）、オオクワゴモドキ、カギバモドキ、スカシサンがいる。ヤママユガ科には繭が利用される蛾としてヤママユ（テンサンⅡ天蚕）、サクサン、クサン、シンジュサン、エリサンがいる。「山繭」飼育としては中津川市川上地区（旧恵那郡川上村）が有名である。川上（かわうえ）地区では地元でヤママユを飼育し、地域の生産者が小規模ながら、生糸生産から絹布製造迄一貫

して進め、各種絹製品に仕上げ、道の駅で販売している。戦後の昭和五〇年以前は信州だけでなく、東濃各地において製糸工場の他各家庭にても桑木を育て、蚕を養い、年に三回は生糸生産をしていた。私も幼少期には町内や親戚にても「お蚕さま」を育て、現金収入の足しにしていた。また自家用機織り機（はたおり）があり、女性が絹布を製造している姿をよく見たものである。

## 第二節 江戸期の養蚕

参考資料は、志村和次郎『絹の国を創った人々』上毛新聞社、二〇一四年七月五日と畑中章浩『蚕』（絹糸を吐く虫と日本人）晶文社二〇一五年一月二五日である。

江戸時代では庶民の絹着用は禁止されたが、貴族・武士層では需要が多く、中国産の輸入が多く、国内の銅が大量に流出した。そこで幕府は輸入を抑えるため国内養蚕を奨励した。江戸時代後半に入ると養蚕技術の研究が進み、多数の「養蚕書籍」も創られた。『養蚕秘録』は出島のシーボルトも入手し、オランダへ持ち帰った。これはフランスのパスツール研究所でもテキストにされた。

江戸後期には夏蚕（なつご）・秋蚕（あきご）飼育の開始と寒暖計を使用することで、生糸や蚕種の増産に成功している。『信州蚕業沿革史料』によると、夏蚕は文政、天保年間（一八一八〜一八四三）に上田地方で始まり、松本

地方に広がり、上州や武州に伝播した。秋蚕も信州で蚕種を風穴に貯蔵することで、夏蚕を秋季に発生させた。これは慶応年間（一八六五〜一八六七）から普及した。

蚕は卵から孵化して繭を作る迄は約三〇日かかり、大半は人間が世話をしないと飼育できなかった。室内の温度管理が大事であり、経験と勘で飼育していた。天保十三年（一八四二）岩代国中村善右衛門が温度計を發明し、嘉永二年（一八四九）「蚕当計」と命名して一般に頒布した。

シーボルトから医術を学んだ二本松藩医の稲沢宗庵から「体温計」の製作方法を知り、研究の結果「寒暖計」を自作したものであった。

また繭から生糸を取る方法は江戸中期では「胴繰り」と呼ばれる木製円筒に巻き取る方法であった。やがて「手挽き」と呼ぶ糸枠に手回し把手（ハンドル）がついた道具が發明され、糸取りのスピードが向上した。十九世紀末には上州で「座繰器」が發明され、歯車で糸巻き速度を上げる仕組みのため、製糸技術は一挙に能率的になった。

## 第三節 幕末〜明治初期の養蚕

前出の畑中章浩『蚕』によると、幕末の開港（神奈川、長崎、箱館）安政六年（一八五九）当時の輸入品の筆頭は綿花、綿製品で、輸出品は生糸・蚕種、それと茶であった。絹関係の需要の増大は全国各地の蚕糸業の勃興に結びつい

た。各地で桑畑が増加し、江戸時代の終わり（慶応）には生糸だけでなく、蚕種の輸出が増加し慶応元年（一八六五）では三〇〇万枚の蚕種紙が外国へ出た。これはフランスを中心にしてヨーロッパでは蚕病（ノゼマ原虫）が大発生し、繭の生産が減少してしまい、その対策として日本産蚕種を求めたものであった。この需要は明治初期だけで、蚕病に対する対応法が確立した。（パスツール研究所）後は、蚕種より生糸の輸出が進んだ。そして明治半ばでは蚕種の輸出は途絶えた。

蚕を育てるには桑畑を作り栽培する必要がある。幕府は田畑に桑を植えることを禁止し、荒地地に植えるよう指示した。明治四年（一八七一）に政府は桑の栽培地は自由とした。リンネが命名した七種の桑のうち現在は三種だけが用いられている。則、白桑（カラヤマグワ）、黒桑（クロミグワ）、赤桑（アカミグワ）である。我が国自生の桑は五種である。ヤマグワ、ケグワ、ハチジョウグワ、オガサハラグワ、シマグワ（沖繩諸島）で列島全域に自生するのはヤマグワ（ボンビシス）である。現在の我が国の栽培種はヤマグワ系、カラヤマグワ系（中国産）、ログワ系（魯桑＝中国産）の三種である。

志村和次郎『絹の国を創った人々』より幕末・明治期の産業革命と製糸業について見よう。

○安政六年（一八五九）中居屋重兵衛が横浜出店、外国商

館との取引を開始、生糸が主要輸出品となる。

○慶応元年（一八六五）原善三郎（亀屋）が横浜で生糸の委託販売で業界トップとなる。

○明治元年（一八六八）富岡製糸場初代所長に尾高惇忠

○明治五年（一八七二）官営富岡製糸場開設、新橋と横浜間鉄道の開業

○明治七年（一八七四）星野長太郎、民間初の器械製糸の水沼製糸所を開設

○明治二十六年（一八九二）富岡製糸場を三井に払い下げ

○明治三十年（一八九七）星野長太郎の働きで「生糸直輸出奨励法」が成立、新貨幣法で金本位制となる。

○明治三十五年（一九〇二）賀養子原富太郎、三井より富岡製糸場を買収、合名会社とする。

○大正三年（一九一四）富岡製糸場近くの「荒船風穴」の蚕種貯蔵庫が全面的に稼働する。三基の風穴で百万枚の蚕種を保管した。その後昭和十年（一九三五）以後は電気冷蔵装置の開発により、風穴貯蔵は廃止された。

◎洋式技術の導入と殖産興業・官営事業の推進

明治における「産業革命」は「国家における器械化」の推進により行われた。それは鉾山・製鉄・灯台・鉄道・電信の五事業（工部省）であり、製糸、織物の軽工業における技術革新・器械化であった。官営富岡製糸場はフランスの器械化技術・技師の導入により近代化を目指した。

江戸時代末期に活動した地域の資産家を産業革命の担い手として「資本主義の事業家」となるよう進めたのが明治政府である。とりわけ養蚕・製糸・織物・茶の輸出面での外貨獲得効果が大きかった。外貨が産業資本となり、機械化による大量生産活動に結びついた。こうして生糸産業が明治の近代産業の発展に大きく寄与した。横浜で活躍した生糸貿易商（豪商）の中核は上州の生糸商人達であった。

又上州生糸は全国的にも高品質であり、人気があった。

しかし外国商人に「買いたたかれて薄利」であった。

そこで、大商人達は「直輸出」により利益増を図ったのである。生糸の売り上げ高は、上州・信州・武州の順である。明治十一年（一八七八）では生糸輸出額の四分の一は新井領一郎が占めた。彼はヨーロッパ中心からアメリカへ販路を開発し、明治十八年（一八八五）にはアメリカ向けが五八%と逆転した。明治四〇年（一九〇七）には約七〇%がアメリカ向けであった。

『中津川市史』（下巻・近代編）に見る落合村の養蚕  
恵那地方は江戸時代の養蚕は夏季のみであったが、明治初年（一八六八）に春蚕を飼うことが開始した。その後明治十四年（一八八一）には養蚕教師により「温暖育」法が導入され普及した。落合村の糸魚川勘次郎等先駆者が秋蚕の飼育と普及に努めた。落合村では、既に旧幕府時代から自家用として蚕を飼育していた。明治の初年頃村内の二・

三の有力者が信州地方より春蚕種数枚を購入して養蚕を始めた。その後村内で養蚕が広まり、明治二十二・三年（一八八九〜一八九〇）頃がピークであった。養蚕のため上田に桑を植え、山林・原野を開墾して桑園にした。中には養蚕業に失敗して資産を失う者も出た。そこで村内の有力者達は「飼育法の講習会」を開き、啓発活動をした。その結果「飼育技術」が向上し、順調に発展してきた。

落合村の鈴木弘道、鈴木利一、上田庄蔵等は新しい副業として養蚕を採り入れ、村民を啓発していった。

#### 第四節 明治と大正の養蚕

(一) 明治から大正にかけての生糸の輸出货量と収入額、輸出先については『横浜市史』（四巻上）の資料がある。

○明治二〇年（一八八七）三一四七千斤（一斤 $\parallel$ 六百g）

一九三九二千斤、アメリカ六七、六%、フランス三四、三%、イギリス四、四%

○明治二五年（一八九二）五四三一千斤、三六三二一千元  
アメリカ六二、六%、フランス三三、五%、英一、一%

○明治三三年（一九〇〇）四六三〇千斤、四四六五七千円  
アメリカ五九、六%、フランス二四、三%、英〇、八%

○明治四〇年（一九〇七）九三七三千斤、一億一六九八八千円、アメリカ六八、二%、フランス二一、六%

○明治四五年（一九一二）一七四三八千斤、一億五千一六

九万三千円、アメリカ七六、六%、フランス一一、五%  
イギリス〇、二%、カナダ〇、一%

○大正二年(一九一三) 二〇七三八千斤、一億九千一一四  
万円、アメリカ六六、六%、フランス一七%、イギリス  
〇、五%、カナダ〇、三%

○昭和一〇年(一九三五) 売上高は約三億円となった。

(二) 『中津川市史』では明治三八年(一九〇五)の養  
蚕状況について、落合村と近隣の村のデータを載せている。

阿木村 養蚕戸数四五〇戸、桑園三五〇反、春・夏・秋  
蚕で六三七石

坂本村 二一〇戸、四五六反、春・夏・秋蚕五九三石

中津町 五一〇戸、六二五反、春・夏・秋蚕一八五七石

苗木村 三七六戸、四七五反、春・夏・秋蚕五九二石

○落合村 一九〇戸、二三一反、春蚕一三石、秋蚕四二〇  
石合計四三三石、落合村は春蚕と夏蚕の生産が低い。

落合村の人々は古来農業の傍ら副業として旅人の宿屋を  
業とし、或いは街道の荷物運搬により生活の糧を得ていた。

明治維新後は、この交通関係の副業は廃れた。

落合村では明治二〇年代迄に村内上田を桑園として養蚕  
活動を続けた。

蚕種紙(蚕卵紙)製造については、明治八年(一八七五)  
の「物産取調書」に、中津川村「蚕卵紙三九一四枚、斤九  
四四円一〇銭、一枚当二四銭一厘二毛」とあり、落合村「再

出蚕卵紙四〇枚、金五円」とある。

明治一〇年(一八七二)では、中津川村「二千枚、金二  
五〇円」落合村「五〇枚、金四円」とある。

営業には「製造鑑札」と「売買鑑札」が必要であった。  
明治九年(一八七六)では、原紙百枚に付売捌代価が

金七拾五銭、製造鑑札は金拾銭、売買鑑札は金二十銭  
であった。明治一〇年代には岐阜県内でも「風穴蚕種」  
が普及し始めている。

(三) 恵那郡における養蚕振興(同業組合)

明治十六年(一八八三) 頃東濃では中津川村の勝野吉兵  
衛が発起人となり「恵那蚕種同業者組合」を設立した。

明治十七年(一八八四) 九月「恵那郡養蚕談話会」が開  
かれ、苗木村の鈴木三蔵が会頭となり、落合村の糸魚川勘  
次郎も参加した。蚕種ではその製造法と貯蔵法が話題とな  
り、糸魚川勘次郎が製造法について解説した。

明治一八年(一八八五) 岐阜県庁では蚕種の肉眼検査を  
行うようになった。恵那郡でも組合総会で、検査済には組  
合の証票を貼り、一枚に一銭を徴収し、組合費・研究費と  
した。

明治二十年(一八八九) 岐阜県では蚕種業者に鑑札を渡  
すことにした。恵那郡では二二名であった。落合村八名、  
長島村三名、東野村三名、坂下村二名、茄子川村、駒場村、  
上村、付知村、椋実村各一名であった。落合村が圧倒的に

多かった。やがて明治末期から大正にかけて、恵那郡地域が養蚕の全盛期を迎えることとなった。

(四) 養蚕事業の貢献者勝野又三郎

明治二七年より数年間、長野県養蚕教師横山春吉を招き恵那郡各地を巡回指導させた。また明治三六年には愛知県高山謙二を招き、数年間養蚕指導に当った。大正元年には三龍社養蚕部中津支所に指導を委嘱し、各養蚕組合の発展に寄与した。

(五) 大正二年(一九一三)八月、岐阜県では「原蚕種製造所」を設立し、無償で配付した。また郡農会や養蚕組合の設立を奨励、養蚕家の共同経営を勧めた。また外国種や交配種の飼育研究も進めた。恵那郡役所も養蚕組合の結成を勧めた。そして「蚕種の統一と蚕病消毒」を指導し、優良生糸の生産を目指した。恵那郡の原蚕の強健さは素晴らしかった。

(六) この地方の蚕種業発達に「風穴」の果たした役割は大きかった。

大正期に入ると無計画・無統制の蚕糸業界へ世界大恐慌の波が押し寄せた。

大正一三年(一九二四)には中津町で「アンモニア式」冷蔵庫が建設され、蚕種貯蔵にも利用されていった。

その結果「風穴」の利用が段々減少した。

## 第五節 落合村の養蚕業

落合村の蚕種製造は盛んで、明治初年より全国的に注目されていた。『中津川市史』六二三頁以降に詳細がある。

蚕種の開始は明治五年(一八七二)に上田庄蔵と鈴木利一の両名が初めて秋蚕種各数十枚を製造し、稻核風穴(長野県南安曇村)に貯蔵し、同年八月に出荷した。この成果が良く、やがて各地から数百枚の注文を受けるようになった。業者も増え、東濃、西濃、三河地方へと販路も広がっていった。落合村の蚕種創業は「明治十二年起業爾来間断無し」(明治三十三年『産業統計報告』)とある。

風穴の利用では、近隣の「神坂風穴」があり、利用に便利であった。「稻核風穴」は遠方にあるため、輸送等不便であった。明治二六年(一八九三)には有志が相談し、長野県西筑摩郡神坂村内の御料林内に風穴を構築した。この風穴は優良で生育効果が高く、注文が増加した。

明治二〇年(一八八七)頃の落合村の蚕種製造家は三〇余戸であった。起業者及び組織は各社あった。

(1) 對山社 加藤万太郎の蚕種製造所、明治十五年(一八八二)より製造を開始した。明治後半から大正五年頃にかけて生産は毎年増加していった。大正期では全国各地に販路を広げている。愛知県、長野県、群馬県等である。

(2) 共栄社(共栄蚕社) 明治二〇年(一八八七)落合村の同業者が一社を結成した。明治二一年の会員は多数で

加藤万太郎（八二七枚が最高）上田庄蔵（三八六枚）井口六郎左衛門（二七六枚）鈴木利一（二六五枚）井口善助（一〇一枚）鈴木惣兵衛（一五五枚）等三〇名であった。

同社の製造高は明治二四・五年頃は約一万枚に達した。

(3) 玉置館 蚕種業者は自家の養蚕と蚕種製造、風穴管理、販売を行うため、多忙で過酷な生活であった。玉置家では、県内だけでなく、越前方面へも販路を広げた。

(4) 五洲館 上田庄蔵の経営した蚕種製造所である。全国的に有名で、後継者の政一は大正二年（一九一三）に

『蚕種要録』を発行した。具体的に製造方法・秘訣等が記されている。風穴蚕種の製造は八月二〇日〜九月一〇日頃が最盛期であった。桑は「小牧」（城下桑）を最適とする。

(5) 井口館 明治末期から大正にかけて活躍した。

『井口館営業案内』（大正二年発行）蚕種の種類や価格についても述べられている。神坂村三坂風穴は明治二三年（一八九〇）に発見した。とある。この年十一月には第一回帝国議会が開催され、十二月には東京・横浜間の電話が開通した。

明治三〇年（一八九七）頃の製造者は二〇戸程であった。この頃の落合村の養蚕は夏蚕を絶ち秋蚕専一となった。

蚕種製造も秋蚕を大半とした。明治三三年（一九〇〇）から製造高が急速に伸びた。明治三八年（一九〇五）の統計では、蚕種総収入金一万五千円、蚕紙一万五千枚、原種

二四万蛾で、昨年より二割増とある。

大正期でも全盛を続けたが、製造家は十七戸となった。全国の商工者名簿には五名の代表者が載っている。

①糸魚川金六（五明館、明治二〇年創業）

②渡辺信吉 渡辺新平（渡辺館）

③加藤万太郎（対山館、明治十五年創業）

④上田庄蔵（五州館・明治四年創業）

⑤上田政一（庄蔵の後継者） 上田宗治郎

業務は蚕種製造販売、蚕種風穴管理、桑苗・蚕具販売を兼ねていた。

## 第六節 大正〜昭和と現代の養蚕

大正中期は個人蚕種業者の全盛期を迎えた。

『帝国蚕業大鑑』（大正九年〜一九二〇年）には二五業者があった。

上田季充、島崎鉄吉（島崎館・明治一三年創業）塚田寿、

玉置芳兵衛（玉置館）神谷林蔵、丸谷鶴吉（恵那館・明治

一九年創業）堀井宅治郎、吉村五郎、井口好澄（井口館）

可知重蔵（好衆館）井口米吉、糸魚川金六（五明館、明治

二〇年創業）松井助治郎、上田庄蔵（五州館・明治四年創

業）加藤万太郎（対山館）鈴木鈴吉、鈴木清通、鈴木隆三

井口杉男（本陣井口家）伊藤金三郎、塚田伊八（恵龍館）

渡辺新平（渡辺館）西尾繁松（西尾館）上田宗治郎、合名

会社進業社である。

取扱種は春蚕種と冷蔵種であり、種々の交配種である。

隆盛した落合村の蚕種創業も昭和に入ると蚕種製造は衰退した。その理由は「浸湯蚕種」の進出であった。

昭和二年（一九二七）の製造高は二万五千枚、金二万五千円であった。昭和初期の繭安値・糸価暴落により落合村の桑園も減少し、昭和五年（一九三〇）には三三五反（三二・五ヘクタール）であり、昭和十四年（一九三九）には一四八反（一四・八ヘクタール）と半減した。

昭和四年（一九二九）の蚕種業者は五戸で四〇人、同五年では専業者がいなくなった。副業六戸である。

昭和八年（一九三三）には副業一戸・一〇人となった。この数は昭和十四年（一九三九）迄続いた。

一方、夏秋蚕飼育戸数は昭和五年（一九三〇）には一三〇戸程であったのが、同十四年（一九三九）には約半数に減少した。

全国的な趨勢を見ると、落合村と同様、昭和四年（一九二九）頃から蚕種製造は次第に降下して行った。昭和九年（一九三四）三月には蚕品種の統制の法律が公布された。同十一年（一九三六）五月、蚕種売買を認可制度とする法律が公布された。同十二年（一九三七）八月には規則により「蚕種製造設備」を統合することとなった。東濃では、中津町の三龍社「勝野蚕種部」が唯一の製造所となった。

## おわりに

ピーク時の昭和三四年（一九五九）に一八七一社あった製糸工場は、現在七社である。内器械製糸が二社、残りは「宮坂製糸所」のような手作業による小規模製造所である。

養蚕農家は昭和四年（一九二九）のピーク時三二二万戸から平成二四年（二〇一二）には五六七戸となっている。

価格競争で外国産（中国等）に負け、国産繭からの生糸生産は〇・七％に過ぎない。かつての生糸生産王国は滅亡してしまった。また繊維産業も外国産に押されて衰退していった。令和で絹産業も黄昏時を迎えてしまった。